

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 尹 相洙

本論文は黄宗羲（1610-1695）の思想遍歴をたどることにより、中国の明末清初期（17世紀）における学術思潮の転換を分析したものである。

黄宗羲は、19世紀末以降、『明夷待訪録』の撰者として先鋭な政治思想の持ち主と評価され、「中国のルソー」などと呼ばれてきた。本論文は彼の全体像を把握することでこうした一面的な見方を修正し、当時の文脈に置き直すことで彼が意図した学術のありかたについて再検討している。

本論文は序論・結論のほか6つの章から構成されている。第1章では明代後半の科挙をめぐる動向を、陽明学の登場を中心に据えて記述する。第2章では明末における科挙のための学問の様相を、学習集団である文社に注目して述べる。第3章では黄宗羲が若い頃の科挙の受験勉強と読書傾向を、第4章では晩年における文学・経学に対する見解を分析する。そして、科挙のための学問から経学・史学の原点に戻った学術探究を重視する姿勢への転換を指摘する。第5章は、実用的な学術として暦学や象数学への取り組みを紹介する。そして、第6章で、同世代の顧炎武と比較しながら黄宗羲の時代の思潮をまとめている。

著者は、黄宗羲はもとより、明末清初を代表する儒学者たちが遺した膨大な文献を丹念に読み込み、時代の特質を明らかにしている。従来、黄宗羲を主として政治思想の面から評価してきた中国思想史研究の傾向に対して、事実認識を刷新させる業績と評価できよう。

その反面、近年の研究成果が必ずしも十分にふまえられていないこと、暦学・象数学に対する著者の理解がまだ十全ではないこと、最終章の顧炎武との比較が同質性の指摘に偏っていることなどは、今後の課題として残されている。

とはいえ、黄宗羲について総合的に捉え直してみせた本論文の成果は国際的にも充分通用するものであり、審査委員会としては博士（文学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるという結論に達した。